

第2章 岐阜県の古代・中世寺院について

第1節 山中に残る主な寺院跡の概要

岐阜県古代・中世寺院跡総合調査で地形観察図を作成した寺院のほとんどが、平坦面群の最奥高所に本堂跡、あるいは最も広い平坦面が位置し、その手前あるいは周囲に中小規模の平坦面が展開していました。

古代に成立したとされる寺院では、地形の最奥若しくは最高所に配置した本堂に至るまでの地形に沿って参道を設定する場合が多く、時期を下るにつれて直線的な参道を中心に寺域を拡大・再興する様子が傾向として見てとれます。

また、大威徳寺跡や清峯寺旧境内のように平安時代末～鎌倉時代成立の寺院で、本堂を取り囲むように多方向へ寺域が展開する事例を確認しました。現在までのところ、飛騨圏域においてのみ確認できる寺域の在り方で、地域的な特徴として評価できる可能性があります。

さらに、特に西濃圏域において、直線的な参道をもつ中世段階の境内の遺存状態が良い寺院跡を多数確認しました。このことは、岐阜県における山地に所在する寺院の分布傾向の特徴とすることができます。

地形観察図凡例



図5 地形観察図凡例

第2節 岐阜県の主な寺院跡

よこくら じ きゅうけいだい 横蔵寺旧境内（旧横蔵寺跡）

所在地：揖斐郡揖斐川町
谷汲神原

現横蔵寺から、約 800m北東の丸山山頂付近にあります。延暦 22（803）年、最澄が山の所有者であった藤原助元とともに、現本堂から谷を隔てた山の頂上近くに草堂を建て、薬師如来を祀ったことに始まり、本堂は天長 5（828）年に建立されました。寛永 14（1640）年に火災により伽藍の多くが焼失し、正保 3（1646）年江戸初期に現在地に移転しました。移転前までは、山上に七堂伽藍を備えていたとされており、現在も本堂跡や仁王門跡には礎石が残っています。



写真4 本堂跡基壇（南から）



写真5 本堂跡（北東から）



写真6 池（南から）



写真7 塔跡推定地（東から）

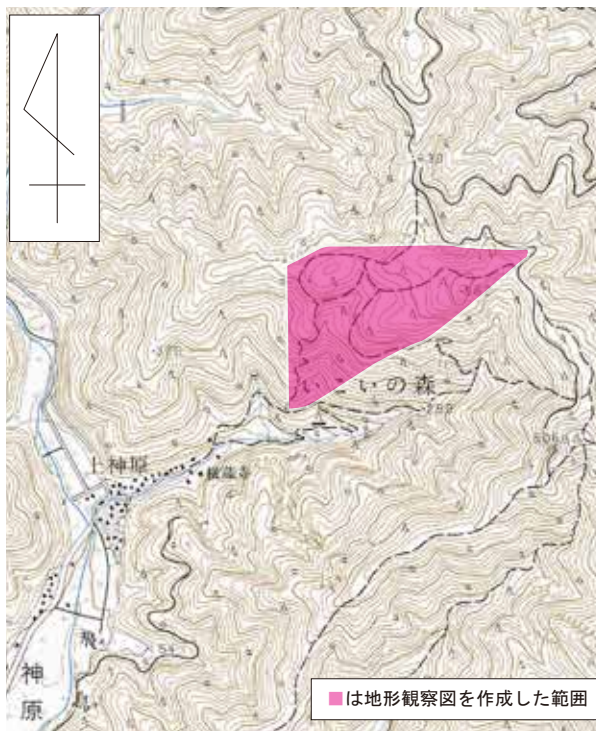


図6 横蔵寺旧境内（旧横蔵寺跡）位置図

地形観察図から

本堂跡と推定される場所を要として、扇形に多数の平坦面が形成されています。本堂跡より西の斜面には、参道上に仁王門跡、馬場跡、講堂跡と推定される場所があります。

推定本堂跡の南方向には塔跡と推定される建物跡と南尾根に広がる平坦面を確認しました。推定塔跡は、推定本堂跡とは20m近い比高差があります。南尾根の平坦面では石積みを確認したことから、坊院などの寺院関連施設があった可能性があり、地形観察図では建物跡と表現しています。

丸山を挟んで西に墓域が、本堂跡の東斜面の先に白山神社があります。



図7 横蔵寺旧境内（旧横蔵寺跡）地形観察図の一部



写真8 本堂跡（南から）

本堂跡を最奥にして、本堂跡と仁王門跡を参道が結び、その両側に平坦面が広がっています。

山地に所在する古代寺院の典型的な特色を見出すことができます。

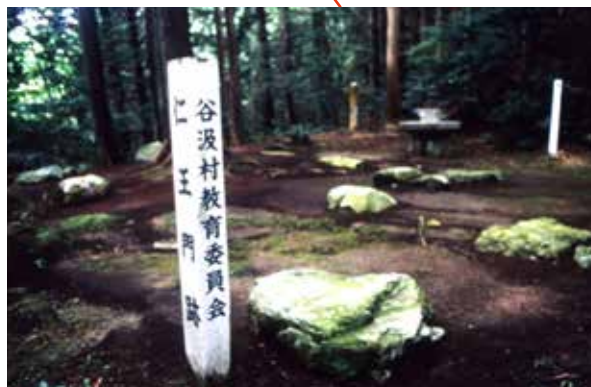


写真9 仁王門跡（南から）



写真10 南尾根建物跡（西から）

えんこう じ きゅうけいだい

円興寺旧境内（元円興寺跡）

所在地：大垣市青墓町

現円興寺から、約 650m 北東に、主要遺構群の金堂跡推定地があります。延暦 9（790）年、豪族池田氏が建てた仏堂に、東国への布教活動の折に訪れた最澄が聖観音像を彫刻して納め、伽藍を建立しました。源頼朝が寺領を寄進し、塔頭・末寺などが 100 寺以上あったとされています。天正 2（1574）年織田信長の兵火により、慶長 6（1601）年雷火により焼失し、万治元（1658）年現在地に再興されました。



写真 11 推定塔跡礎石



写真 12 方形石積み



写真 13 講堂跡石積み

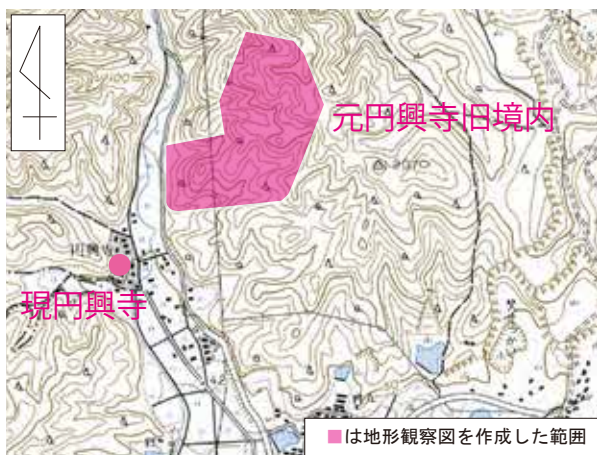


図 9 円興寺旧境内（元円興寺跡）位置図

地形観察図から

平成2（1990）年の大垣市による詳細分布調査概要報告によって、【主要遺構群】、【北遺構群】、【北谷遺構群】、【南谷遺構群】の4箇所に分類されました。

【北遺構群】遺跡範囲の北端の尾根上に、長方形の平坦面があります。四方の切岸によって基壇状に高まっていて、南北に低い土塁があります。

【北谷遺構群】谷筋の参道は、金生山や池田町方面に抜ける道につながります。南東の丘陵山頂平坦面には塚が築かれ、「延暦9（790）年白鬚神社創建之地」の石碑があります。

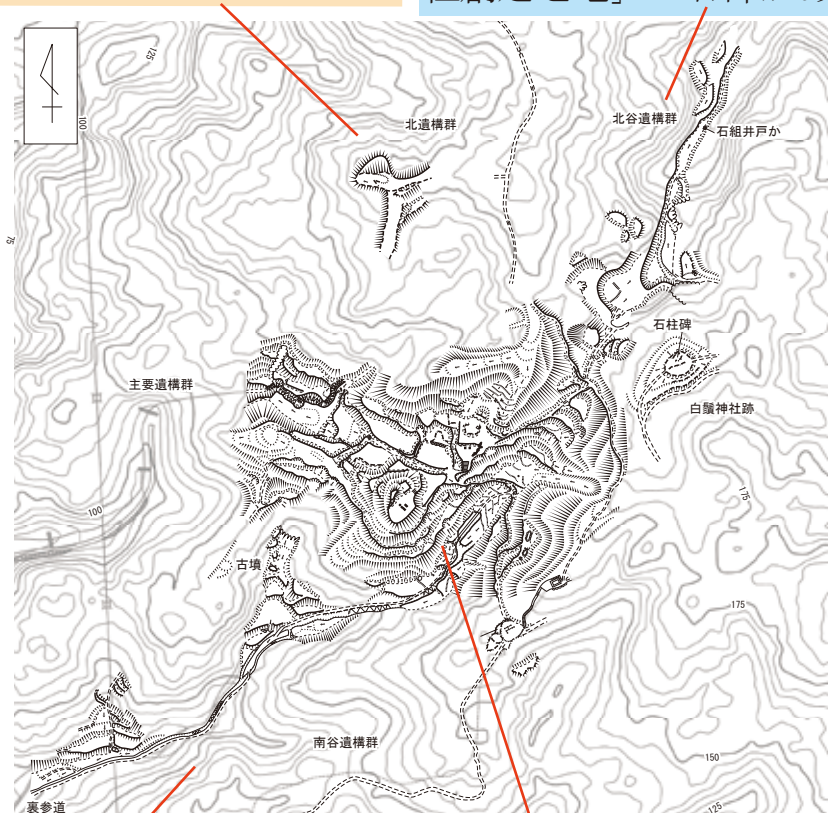


図10 円興寺旧境内（元円興寺跡）地形観察図の一部

【南谷遺構群】表参道や仁王門跡、源朝長公墓所を含み、裏参道の谷筋斜面などで確認できる平坦面があります。下方の平坦面では、石垣や石段が見られます。

【主要遺構群】寺院の中心部には、金堂、講堂、僧房、鐘楼、推定塔跡とされる平坦面があります。五輪塔の部材や山茶碗などが見つかっています。

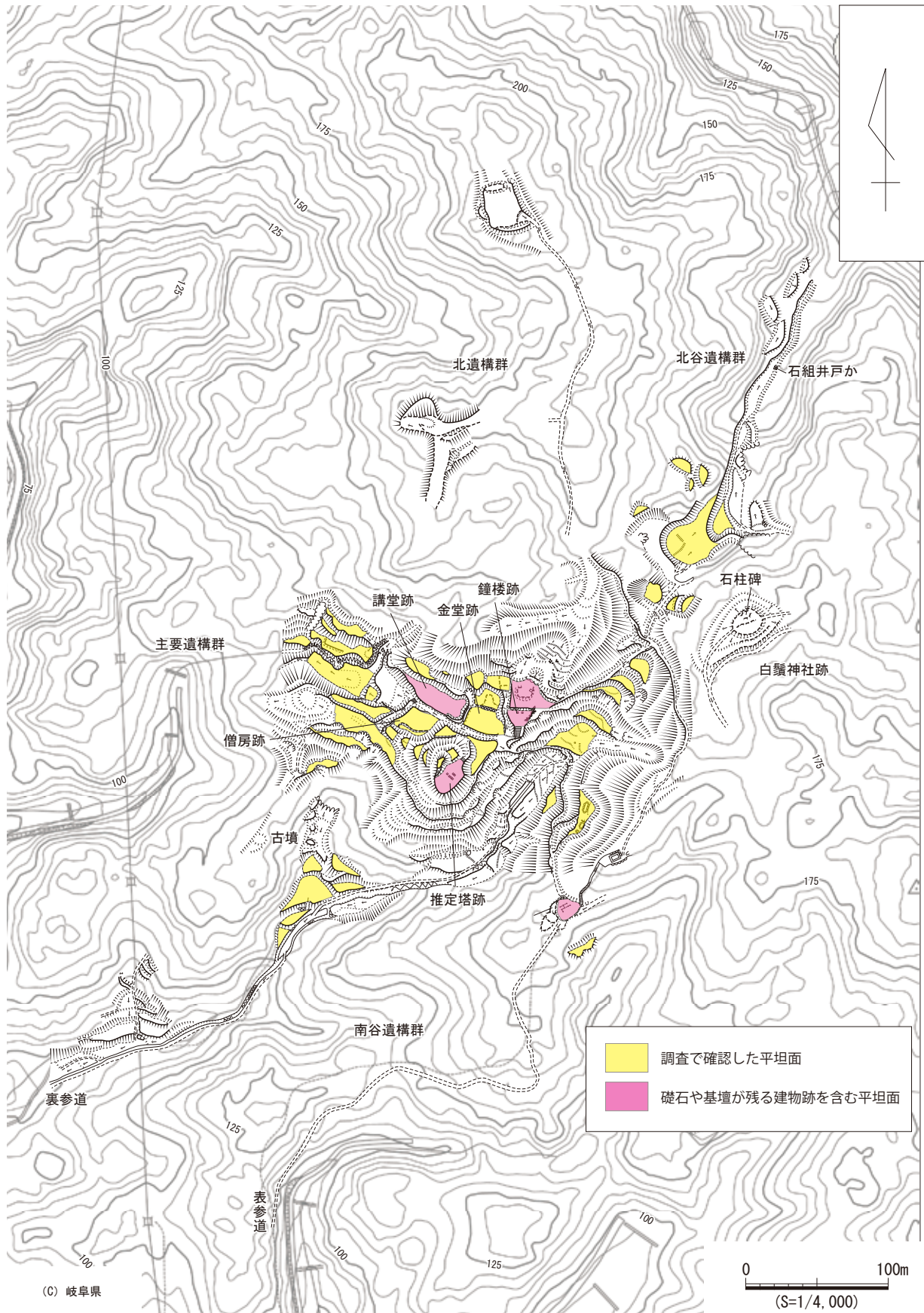


図 11 円興寺旧境内（元円興寺跡） 地形観察図

くりはら くじゅうく ぼうあと
栗原九十九坊跡

所在地：不破郡垂井町栗原

大垣市上石津町と養老町との境に接する栗原山の中腹から山麓にかけて存在したと伝わります。天文 14（1545）年に書き留められた文書によると、「天台山正学院未美濃国不破郡栗原村久保寺双寺寺中百余坊騒動ヲ起ス」とあり、鎌倉初期には「久保寺双寺」と呼ばれ、100 以上の僧房があったとされています。建武 2（1335）年足利・新田両氏の戦いで焼失したとも、織田信長の兵火にかかって焼失したともいわれています。



写真 14 栗原城跡（本堂跡の可能性）



写真 15 五輪塔・石仏



写真 16 栗原中世墓群

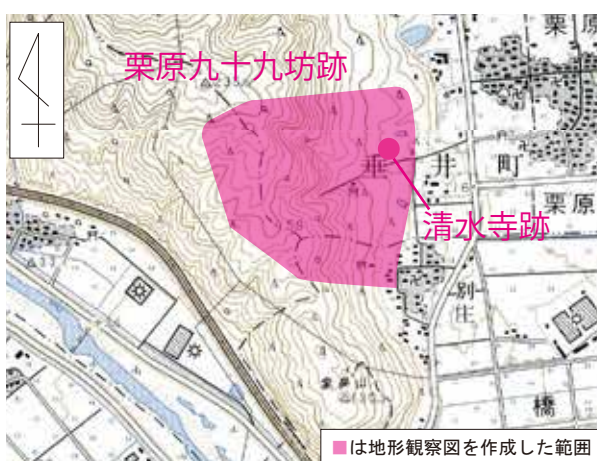


図 12 栗原九十九坊跡 位置図

地形観察図から

平成 24 ～ 28 年の垂井町による分布調査では、清水寺跡を含む東山麓の広範囲で平坦面が多く確認されました。栗原山中世墓群や栗原城跡のある山頂付近からやや下った山腹に、方形基壇や塚状の高まりがある最も広い平坦面があります。

山頂から、栗棘庵や白山神社、御嶽神社、丸山神社のある山腹、山麓にかけて、参道等（図 15 内赤線）が張り巡らされています。本堂等の主要堂宇や、僧房が山頂から山麓にまで広がり、それぞれを連絡する道が整備されていた可能性があります。

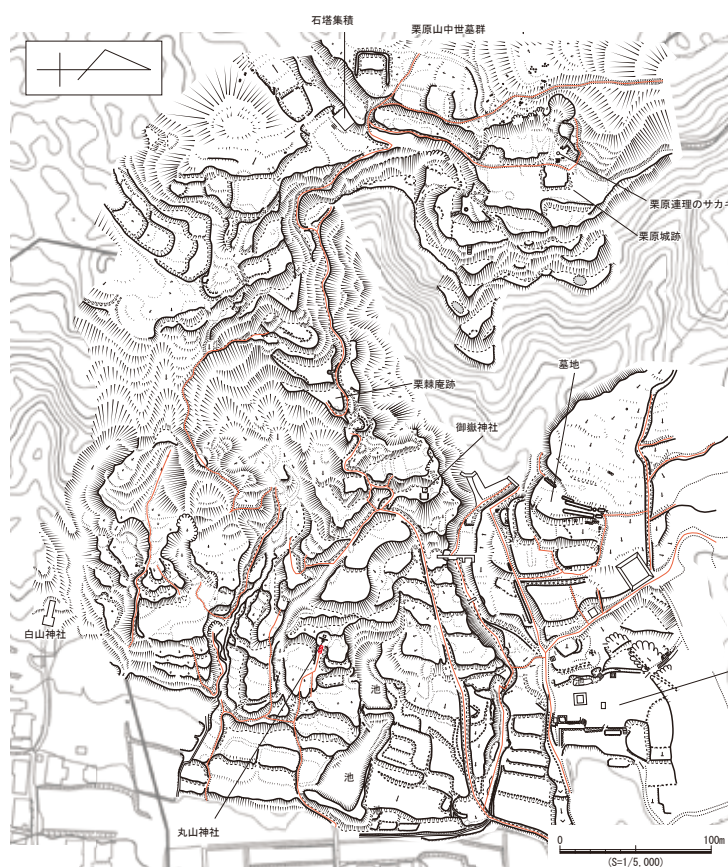


図 13 栗原九十九坊跡 地形観察図の一部

←写真 17 参道（御嶽神社東）

清水寺跡の西山腹と北東山麓には、墓地に伴う平坦面があり、「リリョウジ」と呼ばれる寺があったと伝わり、かつては、往来できる通路が谷上方にも存在していたといえます。平坦面の構成や配置から、山にある「上寺（かみでら）」と、麓にある「下寺（しもでら）」が存在していたと考えられます。

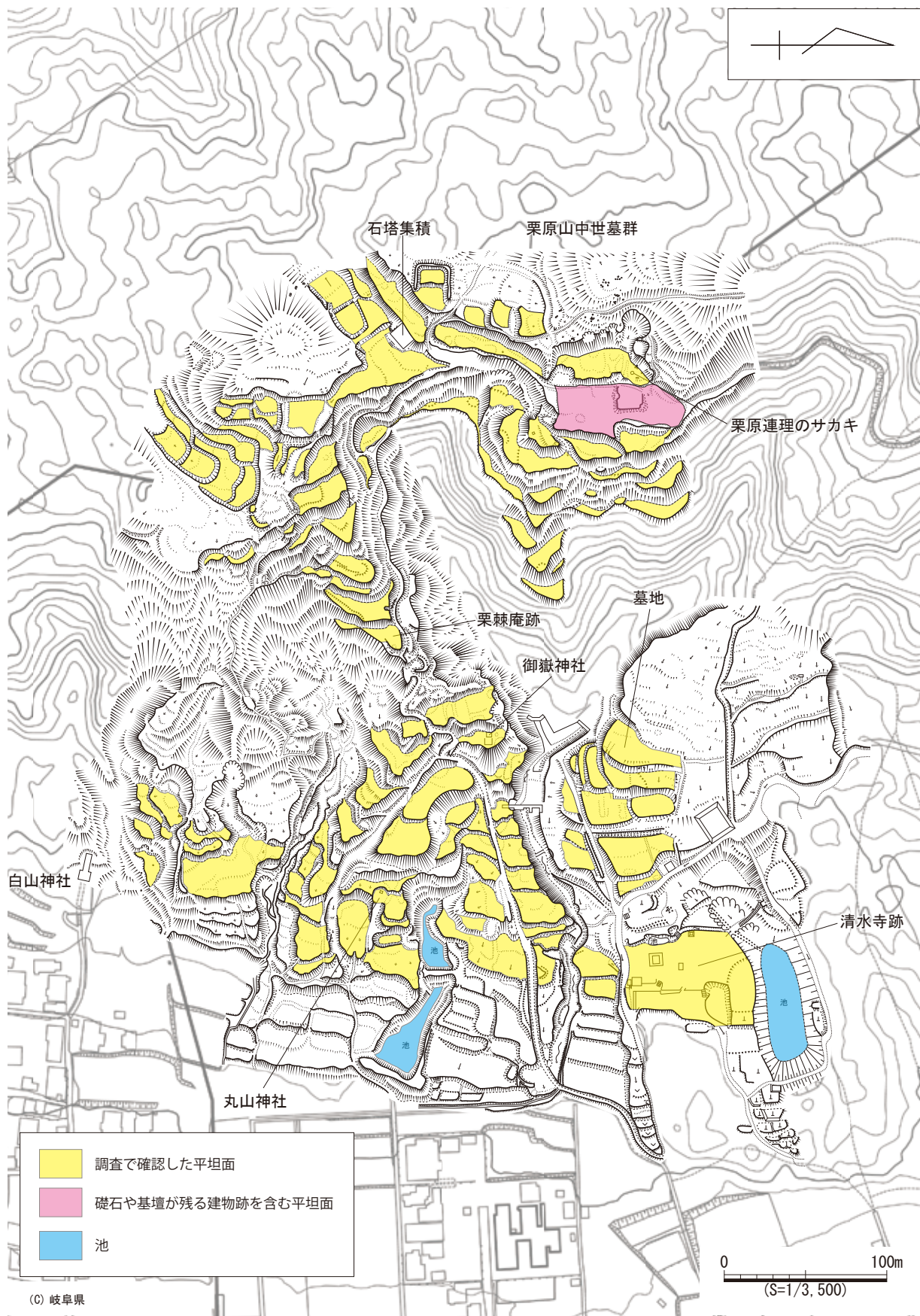


図14 栗原九十九坊跡 地形観察図

かしわ お じ 柏尾寺（柏尾廃寺跡）

所在地：養老郡養老町柏尾

天平年間（729～749）に建立され、当初法相宗でしたが、のちに天台宗に転宗しました。多芸七坊のうちの1つで、柏尾山に24坊が存在したとされています。北側の勢至南谷を挟んで光堂寺廃寺跡、南側の柏尾谷を挟んで南の滝谷には養老寺と、多芸七坊が並んでいます。

織田信長の焼討ちによって焼失したのが永禄5（1562）年（信長記による）とも、天正5（1577）（存徳寺記録による）ともいわれています。



写真 18 千体仏



写真 19 塔跡基壇



写真 20 礎石

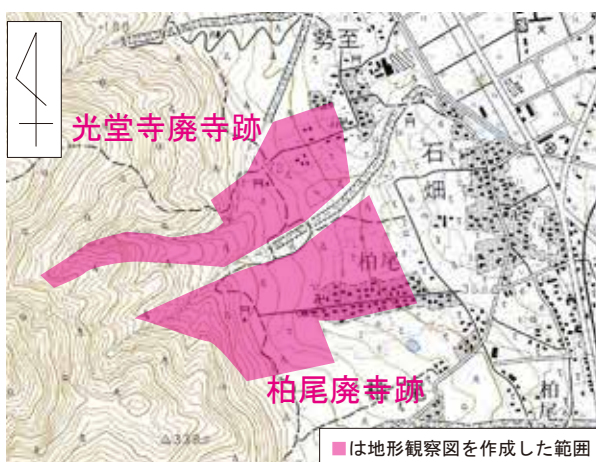


図 15 柏尾寺（柏尾廃寺跡）位置図

地形観察図から

神明神社より一段下の平坦面に、金堂跡と考えられている礎石群があり、その北には塔跡と考えられている基壇跡が残っています。礎石群からは、東へ一直線に参道がのびていて、伊勢街道まで続いています。

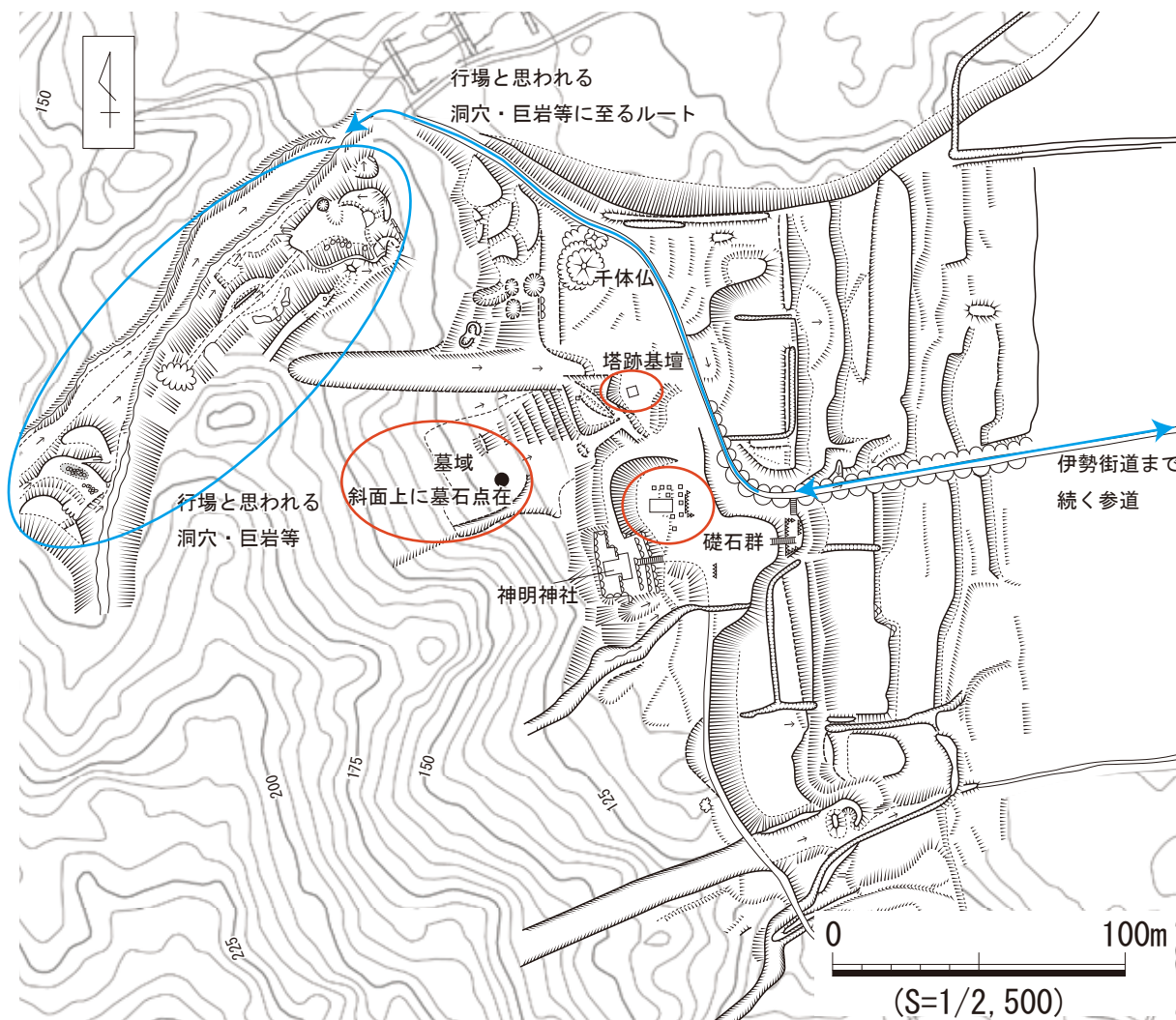


図 16 柏尾寺（柏尾廃寺跡）地形観察図の一部

礎石群の西側には墓域があり、斜面上に墓石と考えられる石が点在しています。北西の斜面には行場と思われる巨岩・洞穴・平坦面があります。洞穴への通路としては、直線参道から北西に折れて北側の谷沿いに上がるルートが考えられます。

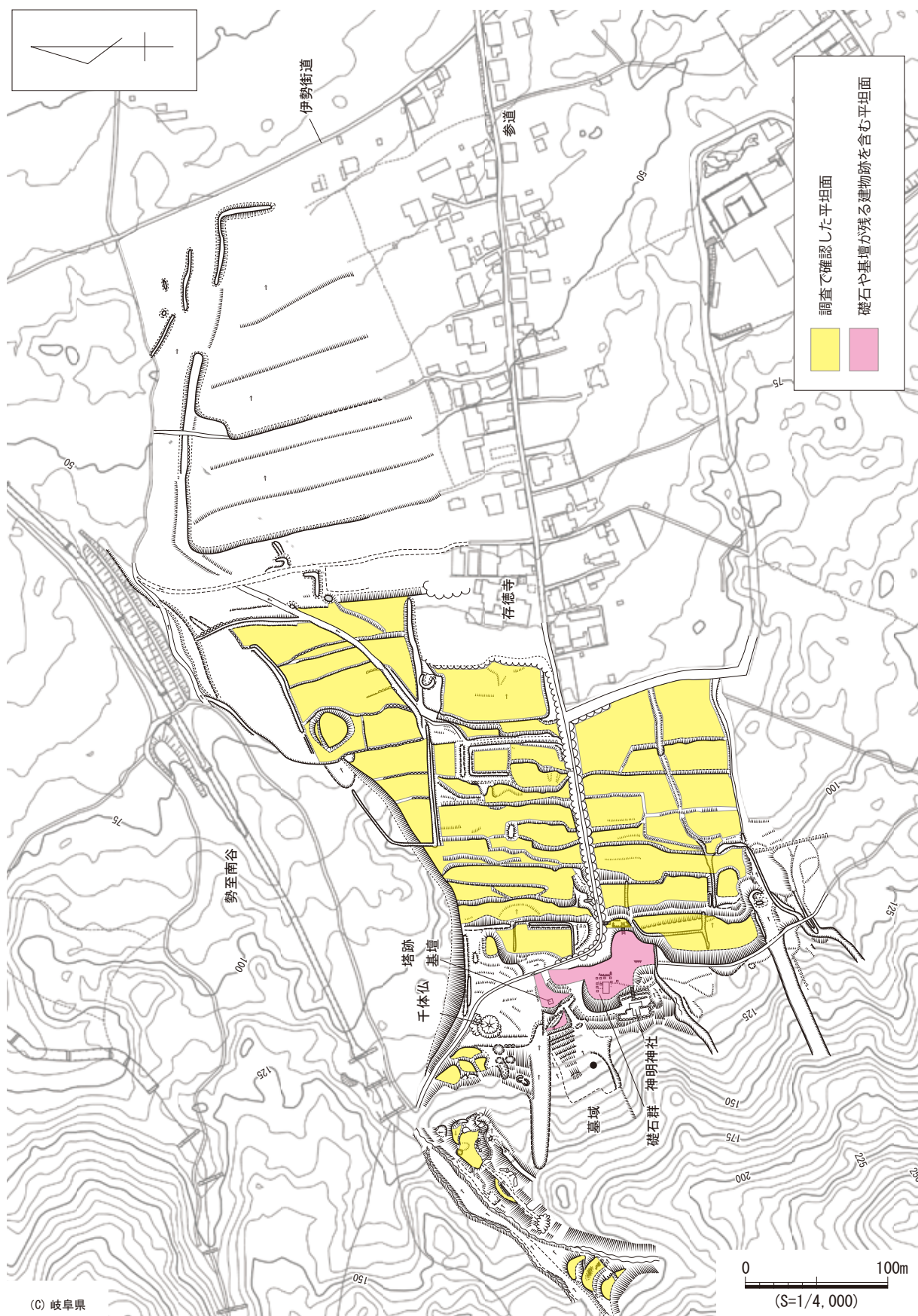


図 17 柏尾寺（柏尾廃寺跡） 地形観察図

せい し ざん こうどう じ

勢至山光堂寺（光堂寺廃寺跡（勢至寺跡））

所在地：養老郡養老町勢至、石畑

文化年間（1804～1818）の記録に、「勢至村、支署に勢至山光堂寺、天平宝字年中の建立。その後三百年を経て破滅す。」と記されています。応永7（1400）年には足利義満の御判物を紛失したと寺が申し出、寺域を従前どおりとする証文が発行されています。東は伊勢街道、西は一瀬山の峰、南は鼬尾□□（南谷か）、北は立岩の下大谷水落ち境と、寺域の境が明示されています。寛正5（1464）年、本願寺の末寺となり、勢至山専明寺と名を改めました。寛永年間（1624～1644）鷲巢に移転し、現在に至ります。多芸七坊のうちの1つで、勢至山に24坊が所在したとされます。



写真 21 礎石



写真 22 巨岩



写真 23 滝と巨岩

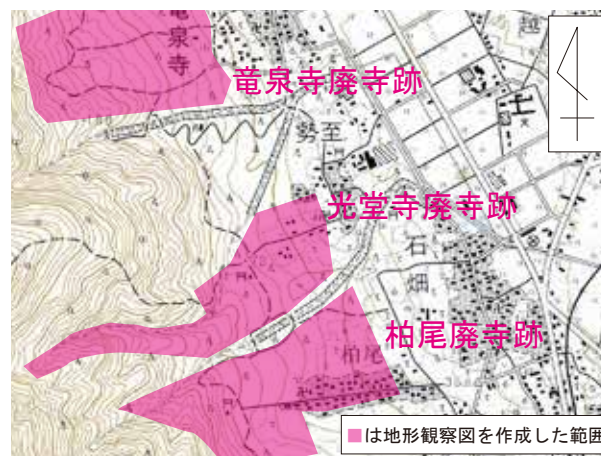


図 18 勢至山光堂寺（光堂寺廃寺跡（勢至寺跡））位置図

地形観察図から

北の勢至北谷と南の勢至南谷に挟まれた尾根上部から現在の住宅地までの範囲にあります。東には勢至鉄座跡があります。日吉神社周辺に礎石が残る平坦面があり、中心堂宇ではないかと考えられています。勢至北谷の東斜面に巨岩・岩窟・集石が集まる場所があり、高台から中心堂宇を望む行場と思われます。勢至南谷の北側に沿った尾根上部には、小さな平坦面群があり、平野部が見渡せる行場と思われ、中世陶器が1点採集されています。この尾根の山裾には、平坦面群があり、石仏・石塔が散在しています。

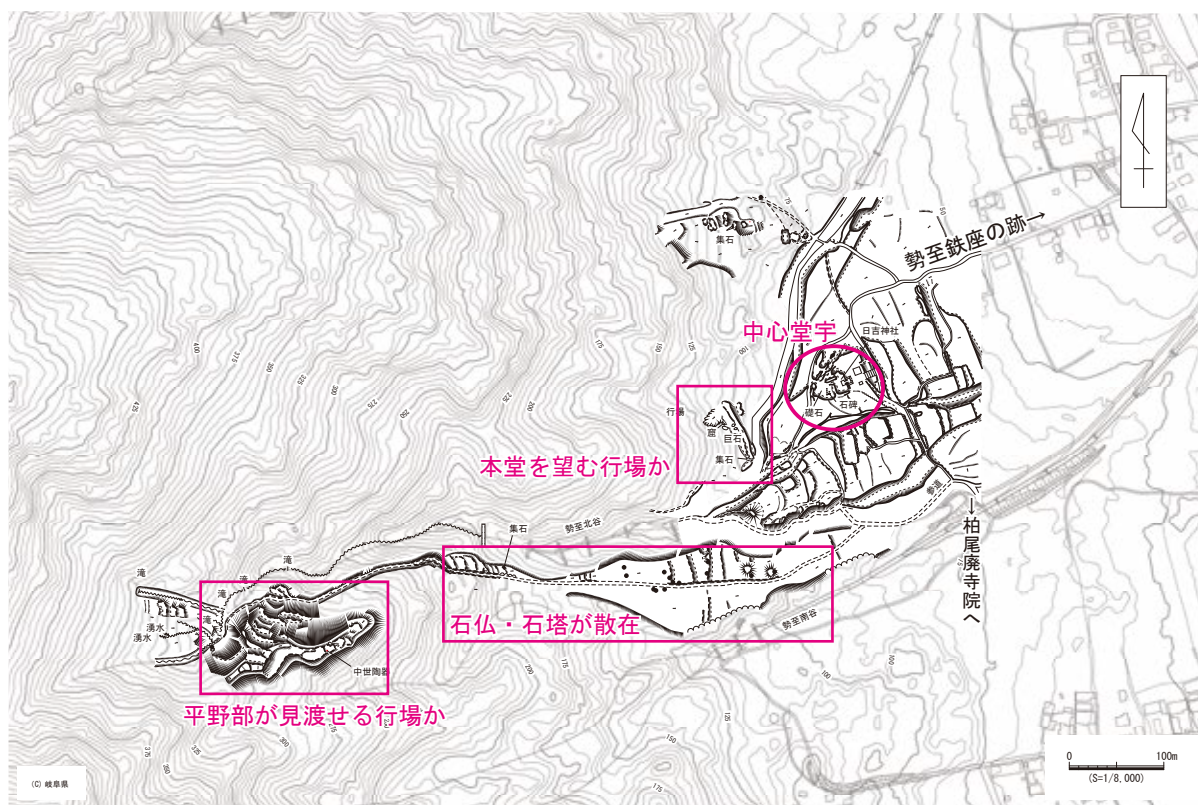


図 19 光堂寺廃寺跡 地形観察図の一部

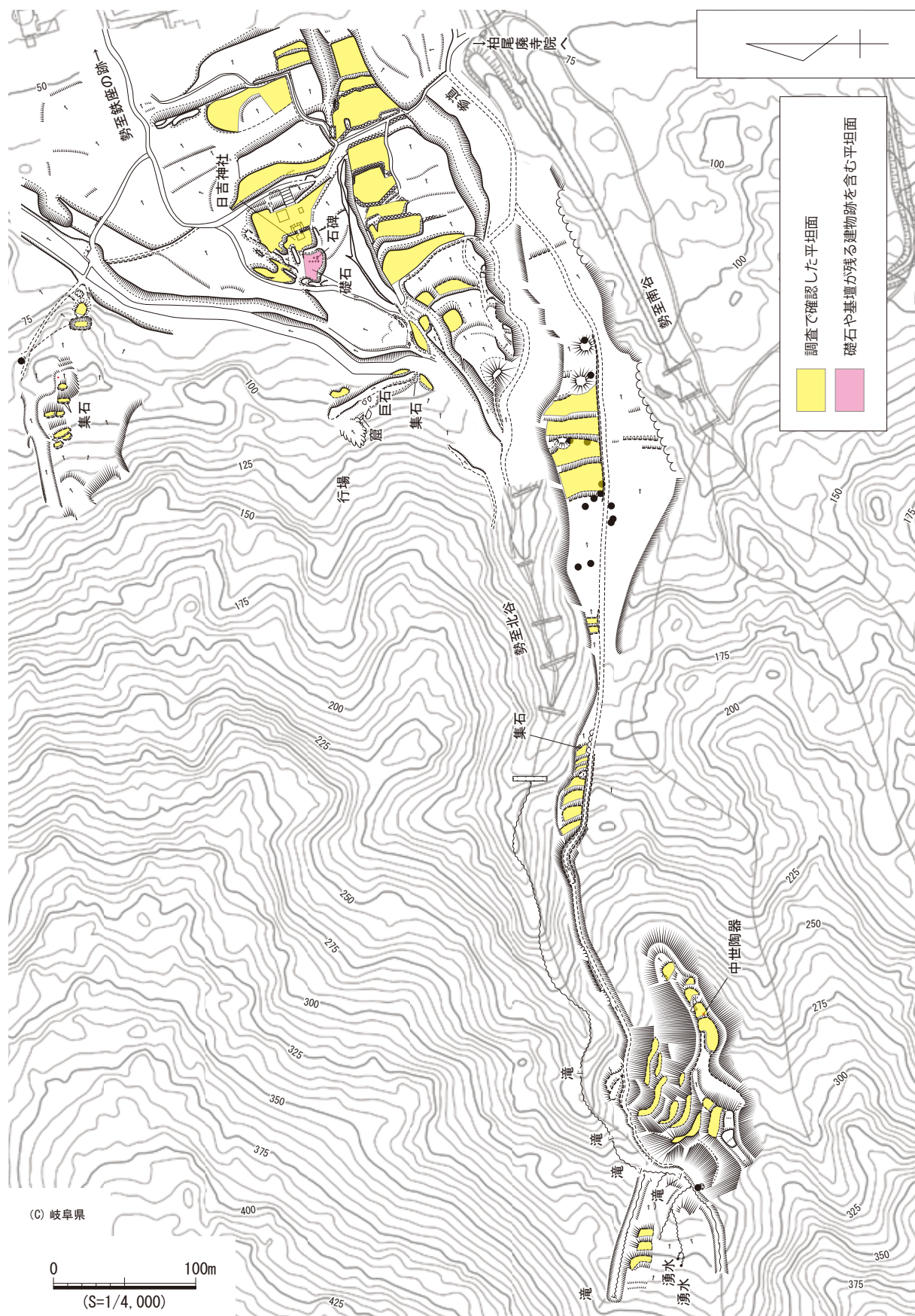


図 20 光堂寺廃寺跡（勢至寺跡） 地形観察図

だい い とくざんりゅうせんじ 大威徳山竜泉寺（竜泉寺廃寺跡）

所在地：養老郡養老町柏尾

文化年間（1804～1818）の記録に、「天平宝字（757～765）に建立、其後三百年を過ぎて破滅す。西山七坊の縁起この寺に在りて比叡山に納まる。七坊の内に大伽藍也。寺家四十八本有之。今に基跡あり。」と記されています。上記の記録では建立後300年を過ぎて破滅とありますが、その後再建され、織田信長の兵火にかかるまで約800年間続きました。多芸七坊のうちの1つで、大威徳山に48坊が所在したとされます。遺跡の最高所の一部は、町史跡に指定されています。



写真 24 礎石



写真 25 参道



写真 26 石積み

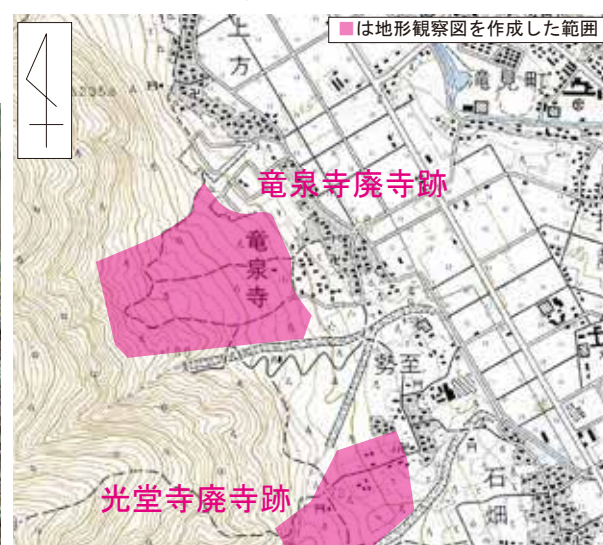


図 21 大威徳山竜泉寺（竜泉寺廃寺跡）位置図

地形観察図から

北の威徳谷と、南の行平谷に挟まれた扇状地に坊院が立ち並んでいます。扇状地の奥に墓域と、礎石を伴う本堂跡や鐘楼跡などの中心施設があり、山裾に向かってほぼ一直線に表参道が伸びています。表参道は、比高差2 mの切岸によって形成されています。

表参道の北には阿弥陀堂跡を起点として、比高差5 mの切岸によって裏参道が形成されています。裏参道は現存する安養院の南脇に続いています。

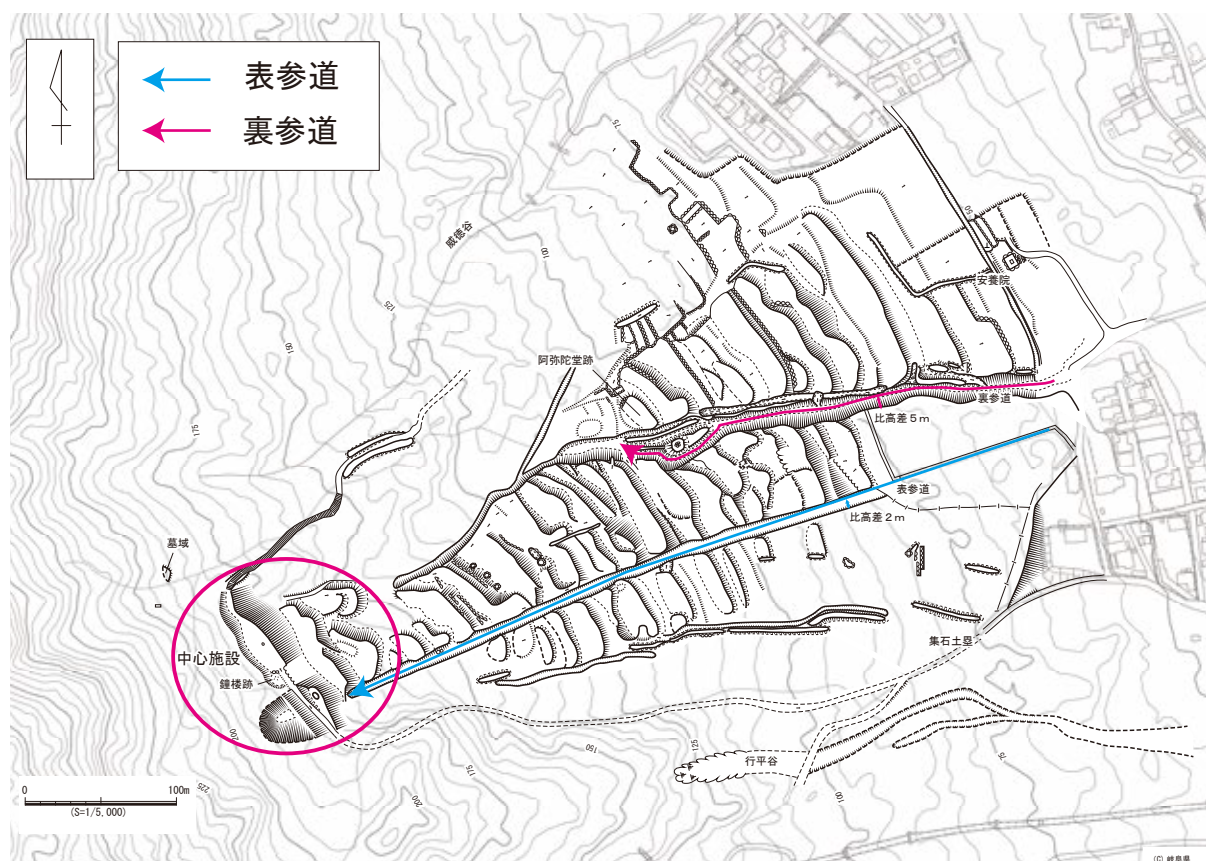
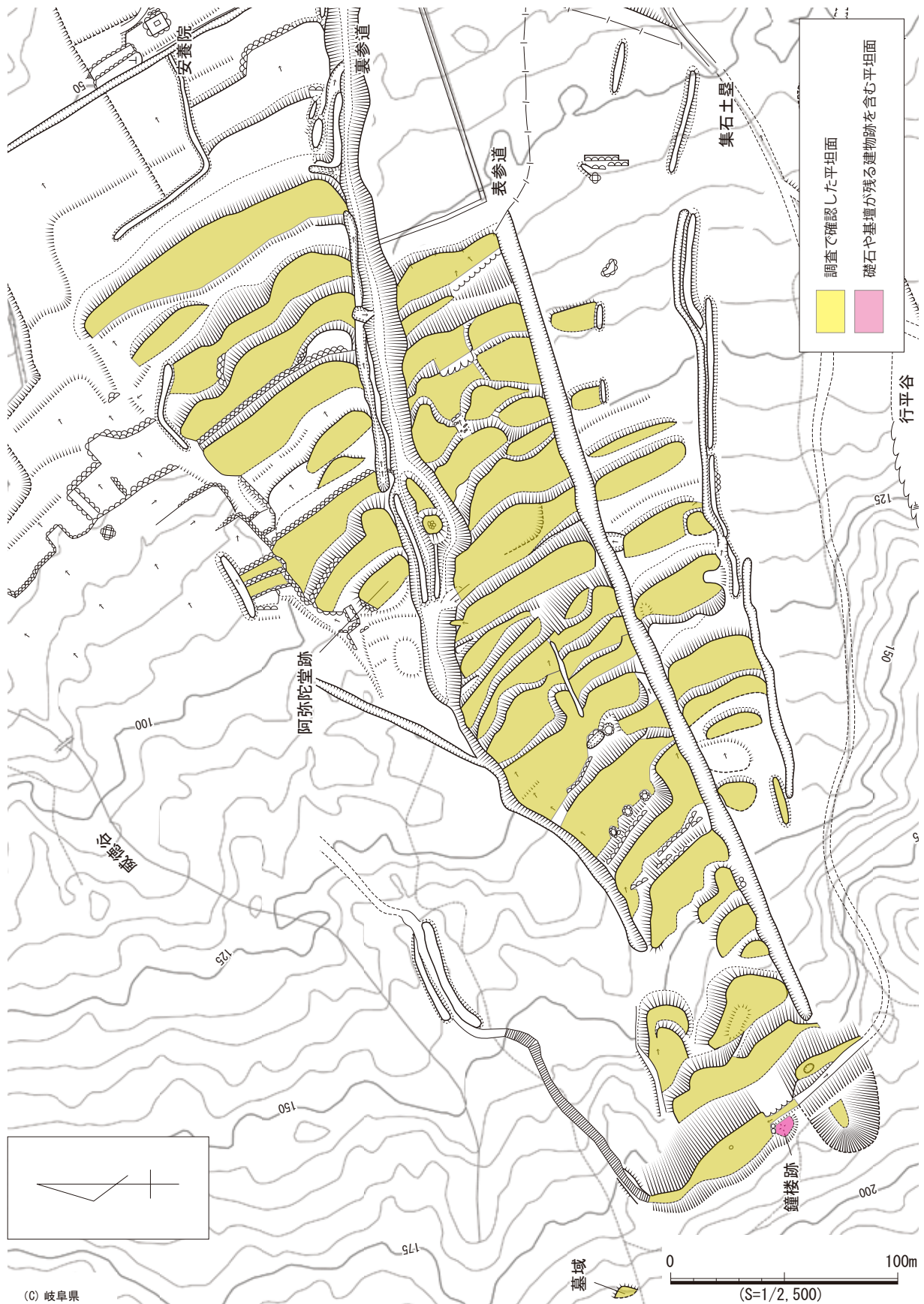


図 22 竜泉寺廃寺跡 地形観察図の一部



(C) 岐阜県

図 23 大威徳山竜泉寺（竜泉寺廃寺跡） 地形観察図

ぐ けい じ きゅうけいだい 愚溪寺旧境内（愚溪寺元屋敷跡）

所在地：可児郡御嵩町中禅堂平

御嵩町北部に連なる北山山地の山腹、現境内から北西約 1 km の地点にあります。臨済宗妙心寺派の日峰の法嗣である義天玄承が、愚溪庵を開創しました。義天は応永 35 (1428) 年に日峰から印可状[※]を与えられていることから、愚溪寺はこの頃成立したと考えられます。永正 3 (1506) 年、土岐政房が寺内の乱暴狼藉^{ろうぜき}を戒める十ヶ条の禁制状を与えるとともに、寺号を与え、愚溪寺としました。山内に徳隣軒・雲松軒・梅仙庵・宝塚庵など多くの塔頭を抱える広大な規模をもち、室町時代禅寺としては最適な土地でしたが、寒気が厳しく不便な土地だったため、天保 11 (1840) 年から嘉永 2 (1849) 年にかけて現在地に移転し、再興しました。

※仏語。師僧が弟子に悟道の熟達を証明した書きもの。



写真 27 本堂跡石積み



写真 28 門跡 礎石



写真 29 庭石



図 24 愚溪寺旧境内（愚溪寺元屋敷跡）位置図

地形観察図から

平坦面①を中心に、北西から南東を尾根、北東を山に囲まれ、南には天池（鏡容池）があります。①への入口は、高石垣の中央に石段後があり、石垣の東側にスロープ状の入口と長屋門跡があります。

北西部には、沢からの流水を高石垣の下方へ流す溝や土塁があるほか、石積みを伴う方形の高まり（②祠堂跡）があります。②の東側で沢の幅が広がりますが、旧寺域図では「泉水」となっています。方丈跡平坦面の北東部は岩盤を削った高い切岸になっていて、切岸側の尾根上には、帯状の広い平坦面が連続しています。③には2間×6間の礎石を伴う基壇があり、徳隣庵の可能性がありますが。

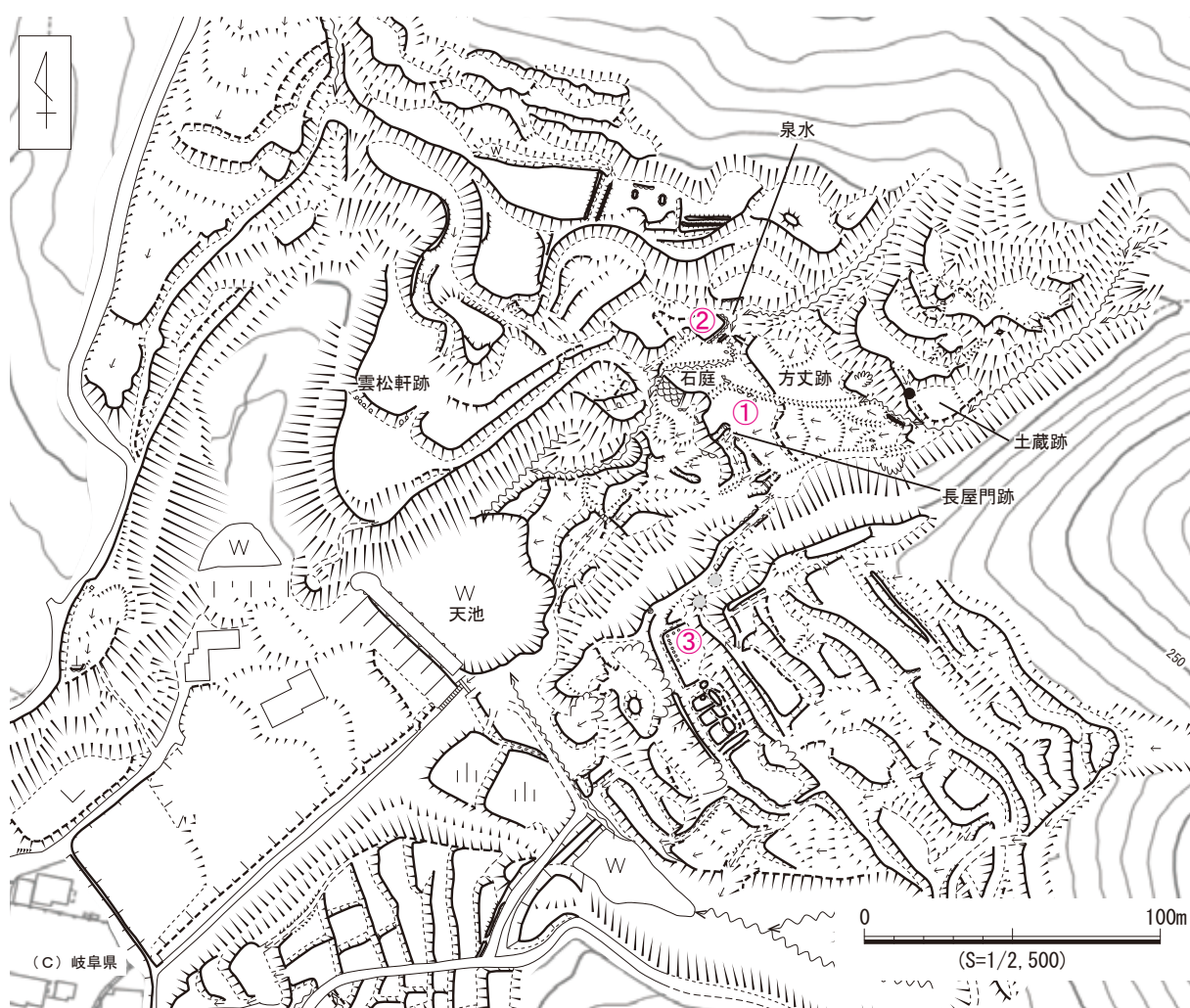


図 25 愚溪寺旧境内地形観察図の一部

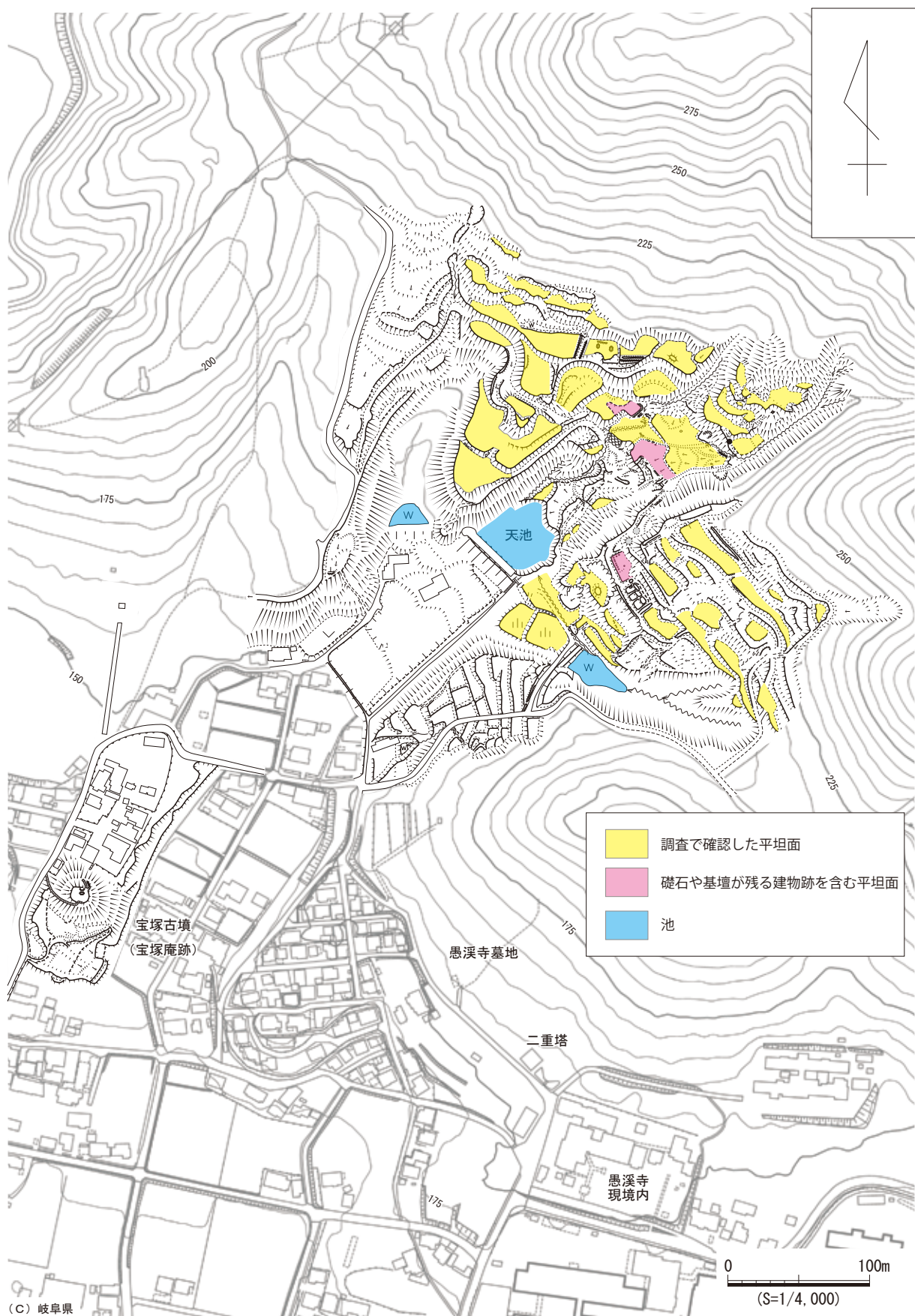


図 26 愚溪寺旧境内（愚溪寺元屋敷跡） 地形観察図

さくらどう い せき ささやま い せき
桜堂遺跡・笹山遺跡

所在地：瑞浪市土岐町

弘仁3(812)年に三諦上人が瑞櫻山法妙寺として創建したとされます。その後、天皇の勅願寺となり、七堂伽藍が整えられたともいわれています。元亀2(1571)年、織田信長の家臣森長可と、土岐信友の家臣石原善四郎によって焼かれましたが、森長可と土岐信友によって堂宇が再建されました。万治3(1660)年に天台宗の高僧永秀が再興を発念し、弟子の賢秀が寛文7(1667)年に現本堂の再建を果たしました。明治元(1868)年岩村藩から廃寺を命じられ、明治10(1878)年には臨済宗寺院の信光寺の受け持ちとなりました。



写真 30 桜堂遺跡 集石（南から）



写真 31 笹山遺跡 集石

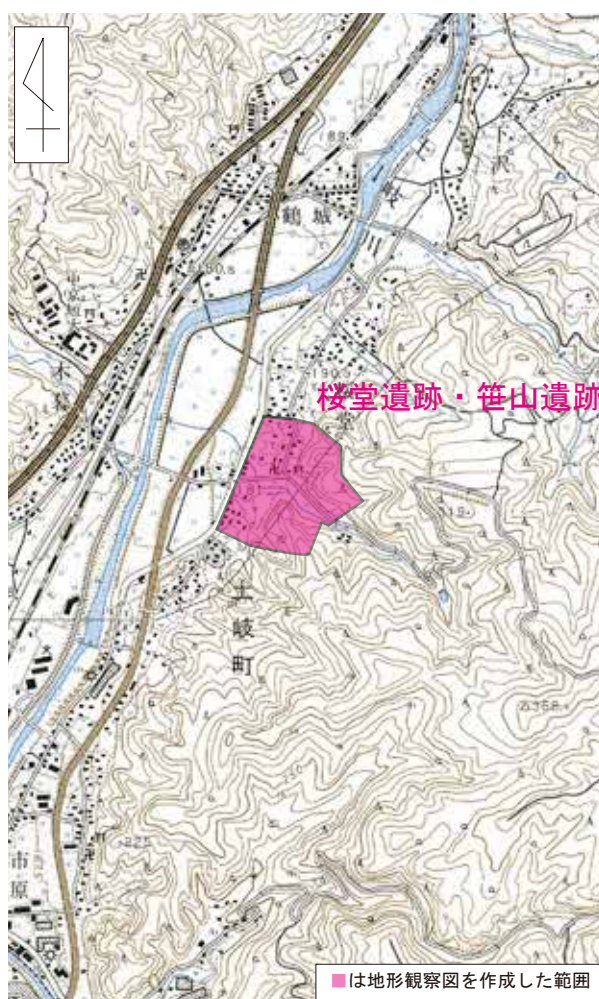


図 27 桜堂遺跡・笹山遺跡 位置図

地形観察図から

【桜堂遺跡】

桜堂遺跡は、各平坦面から多数の遺構、遺物が確認されています。出土遺物から 12 世紀後半から 15 世紀後半にかけて坊院として機能していたと考えられます。

最大の平坦面には、大型の柱穴が見つかったことや後背に中世墓群があることから、旧本堂が建っていたと推定されています。旧本堂から北側の斜面には、中世の石塔が散在する墓域がひな壇状に広がっています。

【笹山遺跡】

笹山遺跡は現本堂の南方 200m の丘陵にあり、山頂の経塚群と、山腹の中世墓群で構成されています。大正 5 (1916) 年に地元住民によって発見され、陶製経筒外容器や和鏡、刀子、桧扇^{ひおうぎ}などが出土しました。

瑞浪市教育委員会による平成 22 年度の発掘調査で出土した古瀬戸や山茶碗などの遺物から、山頂部の経塚群は 12 世紀後半から 14 世紀にかけて造成されたことが明らかになりました。中世墓群では、14 世紀から 16 世紀にかけて造営されたとみられる石塔が多く確認されました。山頂部の経塚群からは、全国的にも珍しい 11 世紀製作と考えられる経箱紐金具も出土しています。

でんしんそう じ あと 伝心宗寺跡

所在地：瑞浪市稲津町萩原

正式名称は、「鶏足山心宗陀頭禅寺」といい、夢窓国師が修行寺として正和3(1314)年に開基したと伝えられています。近年、横山住雄 2015 において「如意輪寺」の跡とする考えも示されています。この遺跡の廃絶時期は不明ですが、江戸時代には同じ地に「三松軒止静庵」が創建されます。文久2(1862)年に焼失し、普濟寺に併合されました。



写真 32 心字池



写真 33 座禅岩



写真 34 墓域集石



図 29 伝心宗寺跡 位置図

地形観察図から

本堂跡の西側に「心字池」と呼ばれる池があります。池の東側は緩い斜面になっていて、そこを登っていくと複数の岩が散乱しています。岩の中に、「座禅岩」と呼ばれる岩があります。坂を上りきると、東西約60m×南北約35mの平坦面が広がり、北側や西側に土塁も確認できます。ここは、修行道場であったと考えられます。

寺跡の南東部には石積みや石列・土塁を伴った平坦面があります。石積みは平坦面の西側2～3mで確認でき、南側には約30mの石列が並んでいます。それに接続する形で土塁が10m続き、さらに東に曲がって15m続いています。これは本堂跡に伴う遺構と考えられますが、現段階では平坦面の大きさなど詳細は不明です。本堂跡から西側に10mほどのところに岩が集積していますが、これは「枯滝」と呼ばれ、夢窓国師が設計した庭園の一部だと考えられています。

北東部は、長径1～2mの石の周りに直径20～30cmの石を並べた集石が、10か所以上に点在していて、墓域の可能性もあります。

参道がどのように続いているのかは不明ですが、遺跡の西側には南北に「中馬中街道」が通り、本堂跡や座禅岩から西側へ参道が続いていたと推測できます。

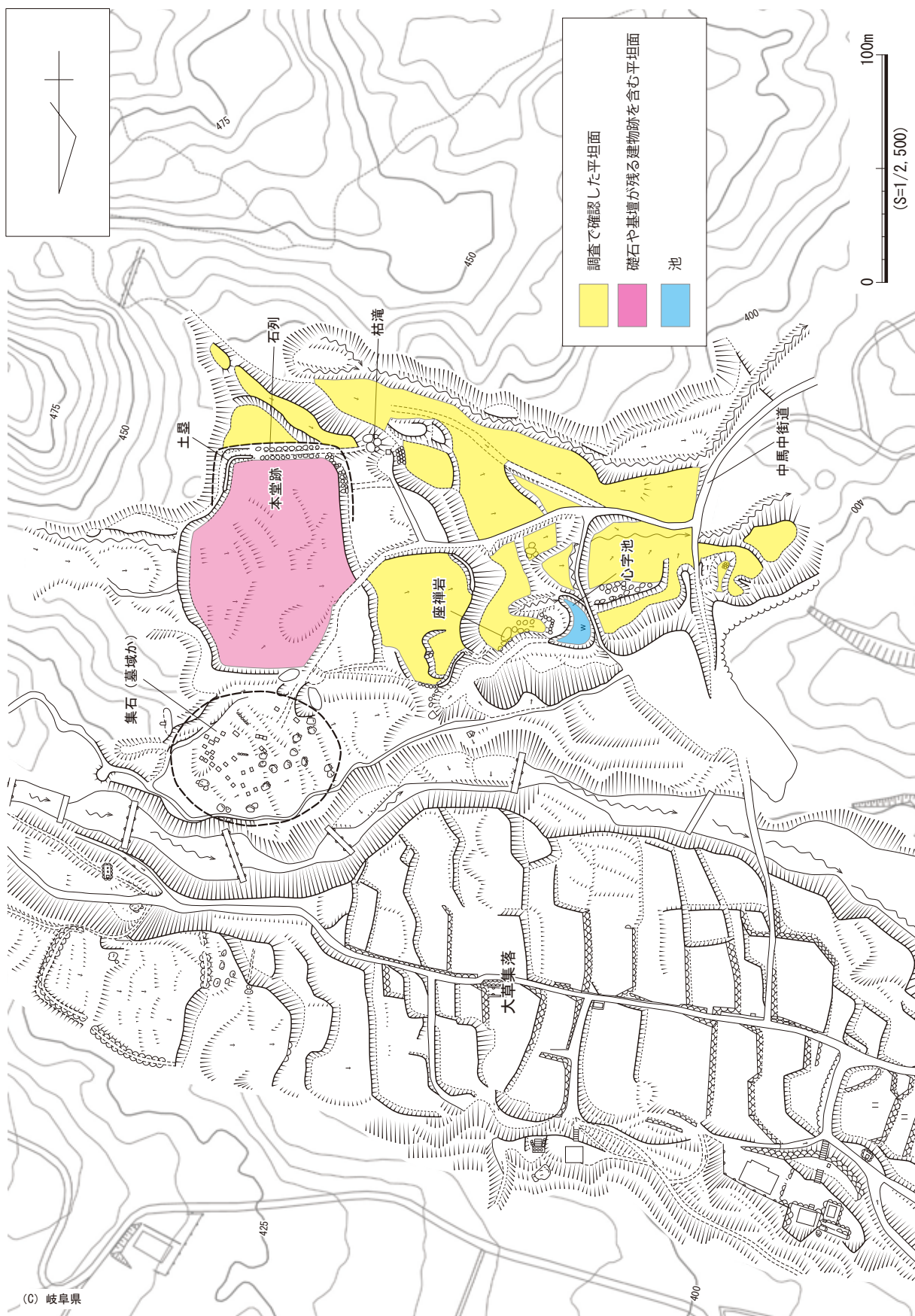


図 30 伝心宗寺跡 地形観察図

ほうじ びざんだい いとくじ 鳳慈尾山大威徳寺（大威徳寺跡）

所在地：下呂市御厩野

飛騨・美濃・信濃の国境近くにそびえる標高 1,402m の拝殿山の南西に伸びる丘陵先端に緩やかな斜面があり、その周辺に遺構があります。

鎌倉時代、文覚上人が諸国を巡っていた際、この地で龍が現れ、真の姿を表すよう祈ったところ大威徳明王となりました。その報告を受けた源頼朝が大威徳寺を建立した、と伝わります。

弘治 2（1556）年に飛騨三木氏と苗木遠山氏との間で起こった「威徳寺合戦」で建物が多く焼失し、さらに天文 13（1585）年「飛騨大震災」で壊滅したと伝えられています。ただ、『飛騨国中案内』や高山市宗猷寺

に伝わる古文書によると、江戸時代の初頭ごろまでは細々と法灯が伝えられていたようです。



写真 35 本堂跡



写真 36 本堂北西 鎮守礎石



図 31 鳳慈尾山大威徳寺（大威徳寺跡）位置図

地形観察図から

丘陵の中心部に本堂跡などの中心施設を設け、南の山門から山裾に向かって尾根上に参道が伸びています。寺院跡の北には、中世墓群が確認されている墓域があります。本堂跡北西に湧水地点があり、本堂東に隣接する池に流れ込んでいます。

下呂市教育委員会によって、本堂跡には、渡り廊下でつながる本堂西建物跡が確認され、東側の標高 750m の地点の礎石を伴う拝殿跡・鎮守跡は、「神社信仰の場」であったと指摘されています。

本堂跡がある丘陵の西側に、幅の狭い地形の湾曲に沿った平坦面が 2 ～ 3 段の階段状に築かれています。ここが坊院跡と考えられます。

参道は、南から山門跡に至るもの（下図赤線）、東斜面から本堂跡付近に至るもの（同青線）、西斜面から本堂跡付近に至るもの（同黄線）、西斜面から本堂跡裏に至るもの（同緑線）の 4 本を確認できました。



図 32 鳳慈尾山大威徳寺（大威徳寺跡）地形観察図の一部

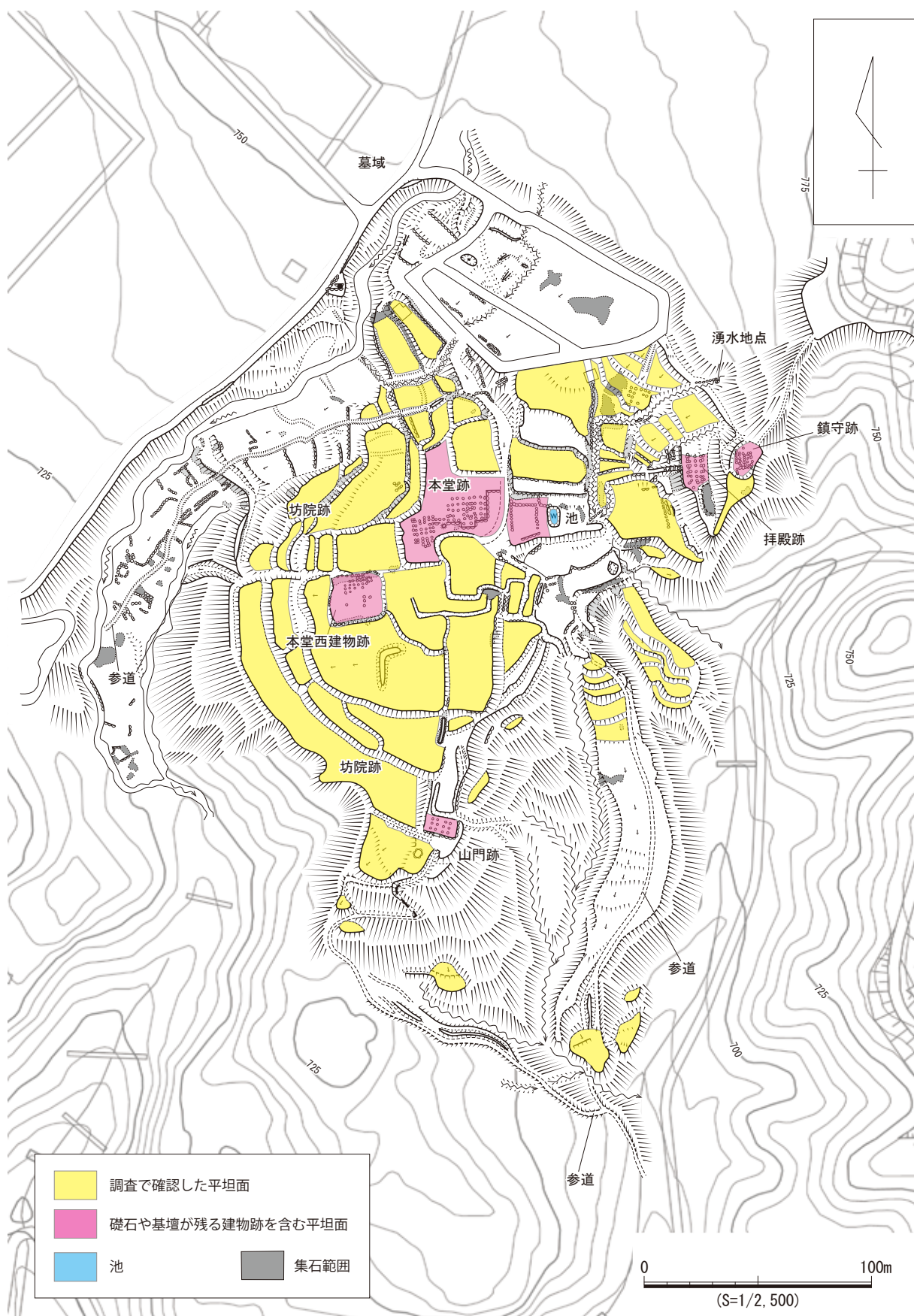


図 33 鳳慈尾山大威徳寺（大威徳寺跡） 地形観察図

こうじゅあんあと いしばしはいじあと
光寿庵跡・石橋廃寺跡

所在地：高山市国府町上広瀬
 （光寿庵跡）
 高山市国府町広瀬町
 （石橋廃寺跡）

成立時期は不明ですが、光寿庵は、室町時代以降、広瀬氏の菩提寺だったという伝承が残っており、代々広瀬氏によって整備されてきた寺院跡だったと考えられます。長野県玉滝村資料館所蔵の鰐口に、「飛州広瀬向上庵地藏堂永享8（1436）年8月24日」と銘文があることから、光寿庵は永享8年まで存在したことが分かります。かつて畑地であったときに礎石が発見され、瓦片などが採集されました。瓦類については、石橋廃寺や名張廃寺に同^{どうはん}範のものが出土しています。石橋廃寺を下寺、光寿庵跡を上寺と呼んだと考えられます。

石橋廃寺跡は、光寿庵から約800m西の山麓にある集落にあります。広瀬小字「いしばし」からは、水田開墾前は多くの瓦や塔心礎が発見さ

れており、昭和61・62年度に国府町教育委員会による発掘調査が行われました。寺号は伝わっていません。



写真 37 礎石



写真 38 推定塔跡



図 34 光寿庵跡・石橋廃寺跡 位置図

地形観察図から

【光寿庵跡】

光寿庵として市史跡に指定されている平坦面①には2か所に池があり、その後背にも平坦面があります。東面は石積みが一部残っていて、主要堂宇跡と考えられます。2か所の池はつながっていて、10m程西に行った上段の湧水点から水が引かれています。

平坦面①から南へ約80mの高台に南面する平坦面②では、中央に石塔、石組を伴う基壇、土塁、L字溝が確認できました。石塔を祀る石組は、1.6m四方で、基壇状の高まりは6m四方、外周の石組を伴う基壇は12.5m×12.9m、土塁は幅1.6m、溝は幅2mです。

平坦面①から東に約60mにある土門（光寿庵土門城館跡類似遺構）はL字に曲がり、通路からの高さは2m以上あります。土門では礎石の可能性のある平石を1点確認しました。

【石橋廃寺】

昭和61・62年度の国府町教育委員会による発掘調査では、寺院にかかわる遺構は確認されませんでした。建物の礎石が複数確認されています。また、遺存している塔心礎は、かつて広瀬町に所在する岡村利右衛門邸に置かれていたもので、江戸期、字十王堂から搬出したものであるといえます。

2次にわたる発掘調査で出土した遺物は、瓦類、土器類、金属類など多数に及びます。特に平瓦に線刻した人物戯画、水鳥、花卉文など特異なものが注目されます。瓦当文様には、光寿庵や名張廃寺と同範の軒瓦を検出し、石橋廃寺跡の線刻のある平瓦とともに同時に2か寺が建立されていたことが明らかになりました。

出土した須恵器は7世紀後葉～8世紀にかけてのもので、灰釉陶器も出土していることから、7世紀後葉から造営を開始し、9世紀以降まで存続したと考えられます。

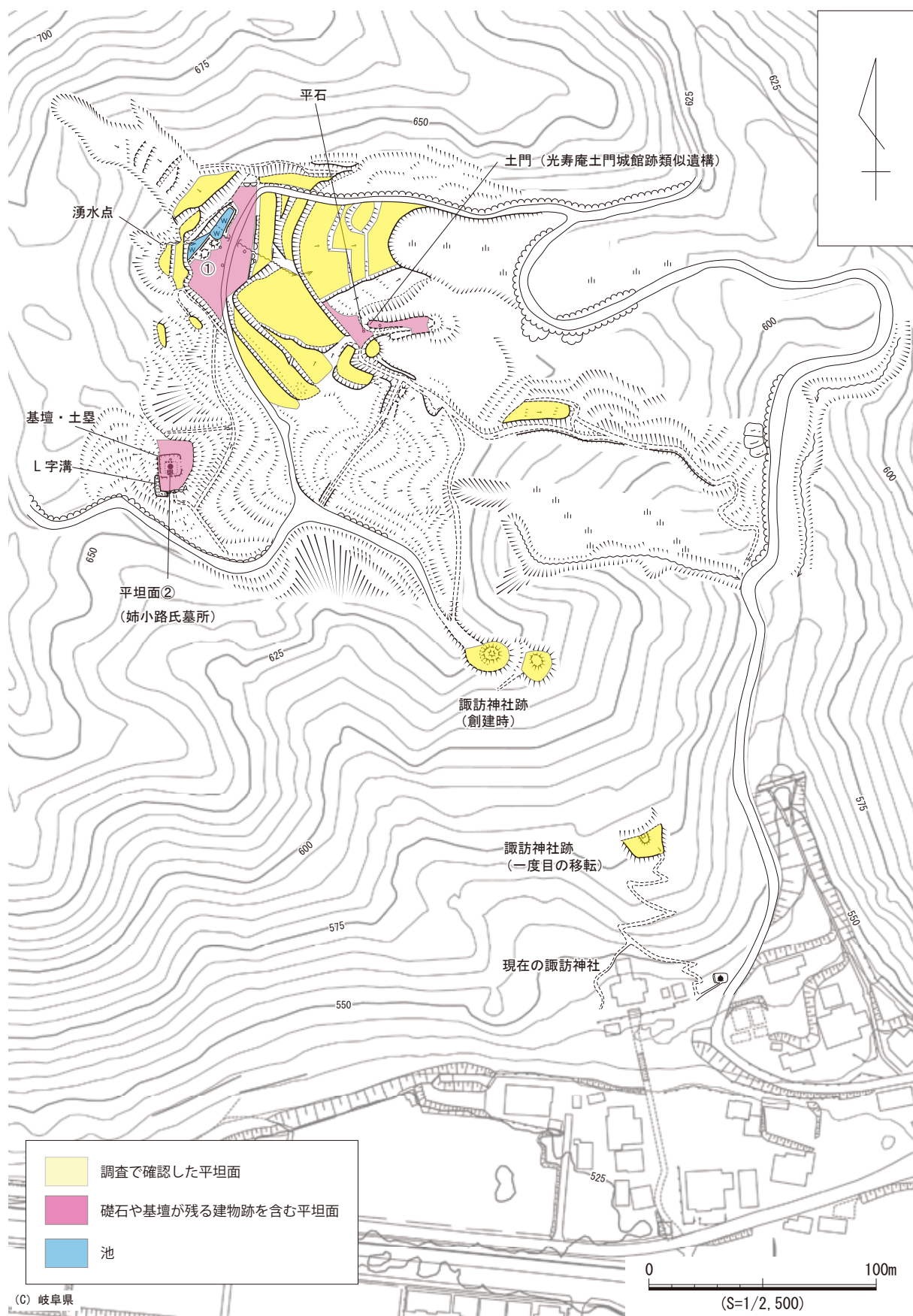


図 35 光寿庵跡・光寿庵土門城館跡類似遺構 地形観察図